

## 年男回顧録



札幌市医師会  
札幌秀友会病院

あん ざい きみ お  
安 斉 公 雄

2025年は巳年、5回目の年男を迎えるに当たり、新春随想への投稿を仰せつかりました。

医師としては4回目の年男となりますが、年男を迎えた年に何を考えていたかを振り返ってみました。

24歳（1989年）：新入医局員として右も左も分からないまま、この世界で働き始めました。とにかく日常業務に支障を来さないように、冷や汗と脂汗にまみれていました。外来、回診、処置、学会発表など、目の前の課題をこなしていくので精一杯でした。同期入局者が比較的多かった年で、仲間に遅れてはならないとの思いで日夜（昼は院内で、夜は繁華街で…）全力投球の毎日でした。新入医局員にとっては単なる飲み会も大事な仕事であり、先輩方からの貴重な教を乞いながら、男芸者としての芸を磨いておりました。

36歳（2001年）：専門医取得後4年目。自分の専門分野を定め、院内外にて知見を広げていました。同じ分野で頑張っている院外の先輩、後輩から多くの経験、知識を深めていくことができ、今思えば恥ずかしいくらい“怖いもの無し”の毎日で、“危ない橋”の渡り方もかなり学習し、充実度はかなり高かったと思います。

48歳（2013年）：新入局以来、長年勤務していた病院を退職した次の年で、今後の行く末を考えながら、良く言えば“充電”していた時代です。一般社会的には脂の乗り切った年齢でしたが、それまで急性期病院で走り回っていた時間が長かったので、すこし休息させていただいておりました。

現職場に入職して5年が経過し、地域との関わりが一層深まった実感があります。今でいう研修医時代と同等か、それを上回る多忙さで、その日を終えるので精一杯ではありますが、余計なことを考えることがないくらいの方がよいのかも知れません。各関節の可動域が狭くなってきているのを実感する毎日で、このままではいけないと常時考えてはおりますが、なかなか行動が伴いません。身体に大きな故障が起きないことを祈り続けている毎日であります。

今年一年の会員の皆様方のご健康とご活躍を祈念しつつ、年頭のご挨拶とさせていただきます。

今年もよろしくお祈り申し上げます。

## 十勝の風土と共に —新たな日常を 見つめて



十勝医師会  
清水赤十字病院

やま だ ひで たか  
山 田 英 孝

10月下旬、仕事を終えて帰る頃には外はすっかり暗くなり、自転車のライトを灯して家路につく。冷たい夜風が頬を刺す。九州で育った私が今、東日本のこの地に住んでいることを改めて実感する瞬間だ。福岡ではこの時間でもまだ空が明るかったが、十勝では日が沈むのが早く、寒さも一段と厳しい。こういう日常のふとした瞬間に、ここが北国だと気づかされる。

気づけば、十勝での生活も3年が過ぎようとしている。福岡からこの地に移ってきた当初は、広大な自然と想像以上に過酷な冬の気候に驚かされた。岩手での4年間の経験があるとはいえ、十勝の冬の厳しさはまた別格だった。肌を刺すような冷たい風や深々と降り積もる雪に圧倒されたが、時が経つにつれ、この土地ならではの四季折々の美しさに魅了され、また、ここで暮らす人々の温かさにも助けられ、次第にこの地での生活が楽しめるようになってきた。

副院長として勤務している清水赤十字病院では、西十勝の広いエリアに住む人々に医療を届けることの責任を日々痛感している。大学病院のような都市型医療とは異なり、病院までの距離が遠い患者さんも多く、限られた資源をどう使い地域全体の健康を守っていくか工夫が求められる。このような環境で働くことは決して簡単ではないが、その分、地域に根ざした医療の大切さを学びながら、日々挑戦し続けることに大きなやりがいを感じている。

とはいえ、時が過ぎても単身赴任の寂しさは簡単には消えない。福岡に残してきた家族や医局の同僚とは定期的に連絡を取っているものの、直接会えない時間はどうしても長く感じる。それでも、この地で地域医療に貢献できているという実感が私の支えになっている。

相変わらず博多弁は抜けないし、ホークスの試合結果に一喜一憂している。それでも、天気予報を見ると自然と北海道に目が行くようになり、九州の醤油を少し甘く感じるようになったことに、ふと自分の変化を感じることもある。最近では、ラーメンも豚骨より塩を好んで食べるようになった。福岡に帰省しても以前ほど落ち着かず、千歳に降り立つとホッとする自分に気づく。アイヌ語由来の地名も少しずつ読めるようになり、3年間の暮らしを経て少しは道民らしくなった気がする。

こうした十勝での暮らしを振り返りながら、北の勝を片手に、清水の静かな秋の夜を一人楽しんでいる。